

古代日本人の意識における二つの方向

—— 生命性と人格性 ——

芝

丞

課題と方法

この小論は、古代日本人が東洋古典文化としての儒教・仏教などを受容する地盤となった土着的意識と思考の構造をできるだけその深層に遡って明らかにしようとする試みである。古代日本人の民族的成立は、これを単純に図式化していえば、その基層は南方、オーストロネシア（中国江南などオーストロアジアをも含めて）系統であり、その上層は北方、アルタイの系統といふことができる。これらは自然ならびに文化人類学的諸領域の協力によって次第に明らかにされてきたが、われわれのここでの作業は、主として言語民族学の助けをかりながら、日本人の固有信仰の宗教表象の分析を手がかりとして、これを解明しようとするものである。宗教表象の解明に関しては、言うまでもなく宗教の本質は人

間が自己の生命と世界とを全面的にそこに投入できるところにあり、したがってそこに自らの存在論と価値論との全ての根拠を見出すからである。また言語についていえば、古代思想に関してはなおさらのこと、その民族の言語の起源・系統の解明はほとんど不可欠の条件といふことができるが、日本語の場合は、他の諸民族の場合と事情が異って、語源的系統的解明は目下探究中であり、これに力を注ぐことも重要な仕事の一つであると考えられるからである。

I 固有信仰の宗教表象

A カミ信仰以前

固有信仰の三つの段階 われわれは日本人の固有信仰の発生的過程を便宜上三つの段階に区分することができよう。すなわち、

(1) カミ信仰以前 (2) 本来のカミ信仰 (3) 混合カミ信仰

カミ信仰は広義では古代日本人の固有信仰全体を意味することができ、狭義では、すなわち本来のカミ信仰は文字通り「カミ」の信仰であり、天孫降臨の神話における天ツ神とその子孫としてのカミを奉じ、古代大和朝国家を形成した人びととその伝統的信仰を意味する。混合カミ信仰は、本来のカミ信仰以前のさまざまな信仰の対象がすべてカミの名を冠して用いられ、本来人格的神としてのカミが、それ以前の自然的ならびに人格的神々のすべてに拡大されて行なわれるようになったものを意味する。

それではこのようなカミ信仰が成立する以前の古代日本人にはどのような信仰が行なわれていたであろうか。またそのような時代的層位はどのように考えられるであろうか。たとえば古事記・日本書紀その他にみえる代表的な神名についてみると、オホクニヌシノカミ、オホモノヌシノカミ、オホナムチノカミ、オホヤマツミノカミなどとなっていて、カミより前の辞はカミにかかる修飾語であるが、ヌシそのものも神名であり、カミという辞なしにも神として用いられる。つまりカミ信仰以前にヌシ信仰やムチ・ツチ・ツミなどの信仰があったし、さらにヌシ信仰以前にモノ信仰のあったことが知られ、こうして最後に本来のカミ信仰が成立したと考えられる。

それではいかにしてこの三つの時期の存在したことを推定できるだろうか。特に本来のカミ信仰の存在、すなわちそれがカミ信

仰以前のそれと混合される以前におけるその推定ができようか。それについて一つの緒は、カミはまた「ミコト」とも呼ばれていて、両者は等価であり、後者はカミへの尊称であるが、しかしそれは必ず人格神にのみ用いられていることから本来のカミ信仰に当たることが知られる。

(一) アルタイ系の宗教表象

1 自然神から人格神へ

● ツチ信仰

人格神としてのカミ信仰以前における自然神の信仰には、今日の日本においてもなお生きつづけているものにツチ信仰がある。中でも火の神としての愛宕信仰すなわち(a)カグツチ信仰である。

(愛宕山は京都のそれをはじめ、大阪の池田、東京の芝など全国いたるところに在るが、これは山の名ではなく、たとえばヤクトの *Altai* の中国字訳と考えるべきものと思われる。)(b)イカツチ(雷)信仰で、ナルイカツチ(鳴雷)、タケミカツチ(建御雷)のごとし。(c)イシヅチ(石鎚)信仰で、これはたとえば四国の石鎚山、記のイハツツヒコである。(d)ミヅチ(蛟・竜)信仰すなわち水神・竜神信仰である。本居宣長はツチのツを助詞ノと理解して今日に至っているが、もちろん後に示すようにチ(靈)の信仰はあるが、ツチそのものは別にあつたと考えるべきこと以下のごとくである。

ツチ信仰の起源・系譜について、報告者自身にとってこの問題

解決への試みの緒となつたのは、一九六九年西独ハイデルベルク大学在留中、文化人類学のK・イエットマー教授のご紹介でU・ヨハンセン講師(現ケルン大学教授)からの貴重な示唆と女史から拝借できたフィンランドのU・ハルヴァ教授の名著『アルタイ系諸民族の宗教表象』U・Harva: Die religiösen Vorstellungen der Altaiischen Völker, Helsinki 1933 (独文では1936)であった。(これは第二次大戦中散逸した稀覯本であったが、焼伴にも女史が所蔵されていた。帰国後の日本でも大林太良教授にお尋ねして氏のところに在ることを知った。)

この書には「自然の主たち」という章があつて「アルタイ系諸民族は、ある一定の場所とか領域の支配者と考えられている靈的存在をその場所とか区域の《主たち》と名づけている。そのような主たちの名を動物や植物でも、さらには種々の事物や自然現象でさえもつことがある。この意味で用いられている語はタタール語では ar, ea もしくは ar, yakut 語では ixi, priyart 語では edzen, tsingkus 語では amaka などで、すべて《主人、家長、所有者》を意味する」(S. 386)。中でもヤクートやプリヤートのそれらは特に注目される。たとえば die ixi:cia 《家の主たち》、n ixi:cia 《水の主たち》、ukhnu edzen 《水の主》、atruk ixi:cia 《小道の主たち》、oin edzen 《森の主》というように。この ixi: は音韻からも意味内容からも日本語のツチ *tsuchi* と共通のものではなからうか。まず当時の南島語的音韻性格の日本語に受け

入れられるためには ixi: は *tsuchi* としてしか受け入れられなかった、日本語に二重子韻がなかったから。さらに単語は原則として二音節であつたから *tsuchi* は *tsu* か *tsu:* として受け入れられた。*tsu:* はイツ《稜威、敵、齋など》であり、*tsu:* がツチ《土、鎧》、もつともこれは中国字の訓を当てただけであること、松村(武)博士の解釈が正しいと思われる。(以上ツチ信仰については、「愛宕信仰の系譜」日本民族学会発表 一九七〇年その他。)

●ウシ(ヌシ)信仰

人格神として考えられる。ミクマノウシ《三熊の大人》(紀、神代上)、オホクニヌシ《大国奴斯》(記、神代)、オホモノヌシ《大物農之》(紀、崇神)、コトシロヌシ《事代主》、オホクメヌシ《大久米主》、カムヌシのごとく。ヌシはノ・ウシの約まったものであるという宣長の説は正しいであろう。後世のナヌシ《名主》、ナは土であり、地主である。トルコ語で *nu* は頂、尖端、主人であり (M. Rasmussen, S. 517)、ドラヴィダ語で *nucci* は頭にいた

●ムチ信仰

これも人格神として現れている。代表的なものはアマテラス(天照)すなわちオホヒルメムチ《大日靈貴》、オホアナムチ《大己貴》(紀、神代)、オホナムチ(記、神代・万葉)、オホナモチ(延喜式)など、すなわち大國主である。ナは土地、ムチには貴・貴人・尊などを当てている。これもツチ・ウシなどとともに北方、

アルタイ系に由来するものと考えられる。モンゴル語で *noxi* 《手足・四肢》(小沢, p. 235)、トルコ語でも *noxi* は **nuci* 《Gl. ed, Hande u. Füsse》に廻り、モンゴル語に由来するとされてゐる (Rasänen, S. 546)。*mutri-* 《手でつかむ、手で為す》(小沢, p. 238) のごとく《所有する》とか《支配する》とかの意味からきたと考えられ、古代日本語でもウシハク《領》である。**pari-* 《つかむ、握る、捕える》(ib., p. 47) も *ro-p* という子音交代ではなからうか。なお、ウシ(ヌシ)とムチとの層位に関しては多くの用例がないので確言しにくい。ミチヌシノムチ《道主貴》(紀、神代)とあるところからみると、ムチが後から成立したとみることができようか。

●ツミ信仰

自然神の信仰としてなおひとつ有力なものにツミ信仰がある。その代表的なものはヤマツミ《山祇》信仰で、伊予国大三島のオホヤマツミ《大山祇》神社のごとくである。これは全国の三島神社の総本社であるが、記にも摂津の三島郡から遷されたものであり、韓の国から由来すると記されている。またよく知られているワタツミ《海神》がある。このツミは自然神から人格神への移り行きを示している。それはトミ・トモにみられる。

トミ・トモ《富・友》については次田潤氏が内藤湖南の説を注意されたように、扶余・高句麗・百済の始祖東明・朱蒙・都慕などはこの系統に属するものと考えられる。アメノトミノミコト

《天雷命》(古語拾遺)、スキトモ《組友》(記・紀)オホトモ《大友》皇子(紀)などは単なる友・伴のごとき意味ではなく首長の意でなければならぬ。またこれと関係があると思われるタマ《玉》と共通ではないか。後に述べるタマ《靈》は南島に属するが、玉を意味するタマは少なくとも次のような形で北方に見出される。

(も)ともこのタマ《靈》とタマ《玉》とはならぬかの結びつきの可能性が考えられるので、タマ《靈》の項で述べることにする。玉を意味するとみられるものにトルコ語の *tom, toh* 《円、球》(Rasänen, S. 48) があり、それが頭を意味し、上述の頭首が支配者に現われ、日本語のツム・ツムリ・ツブリなどにもみられるのではなからうか。ワタツミ《海神》をトヨタマヒメ《豊玉姫》としているのもこれによるのではないか。

2 アニミズム(靈魂觀念)

●チ(靈)

上記のツチ・ウシ・ムチなど自然神・人格神に先行してそれらの基礎をなす北方アニミズムはチ《靈》の觀念である。たとえばククノチノカミ《久久能智神》(記、神代)、ククノチ木木遲《是木靈也》(祝詞、大毘祭)。イノチ伊能知《命、寿》(記、神代・景行)、イノチ伊能致(紀、雄略)。ヨロチ袁呂智《大蛇》(記、神代)、平路知《毒虫》(和名抄)など。しかし靈魂としての北方のチの觀念はあまり明確には意識されず、むしろ潜在意識的にチカラ《力》の表象としての方が強く、靈魂の觀念としては後述の南島系のタマ

信仰が圧倒的に強く残っている。

このような北方、アルタイ系とみられる諸表象を層位的にすればチが最も下層に、ツチがその上に、さらに上層にツミ、ウシ、ムチがみられ、最後に後述のカミ信仰が最上層に成立することになる。

(二) オーストロネシア系の宗教表象

カミ信仰以前の宗教表象の中でオーストロネシア(南島)に系譜をもつものにはどのような表象があるだろうか。われわれのこれまでの考察では、人格神はもちろん、自然神のそれもほとんど見られず、アニミズムに基づくタマ信仰と、さらにそれらに先行し、日本人の意識の最深層部には人類の最も原初的マナイズムとしてのモノ信仰が明確な形で見られる。

1 マナイズム

●モノ Mono 信仰

今日われわれ日本人が日常最も多く用いる基礎語の一つにモノという語がある。それは個々の物(体)はもちろん、事象としてのモノゴト、人物としてのモノ(者)、態度としてのモノシズカ、道理としてのモノワカリ(分別)、心としてのモノオモヒ(思)、威力としてのモノモノシ、さらには絶対的なモノ(者)というように。

オホモノヌシ《大物主》のモノは靈威であり、モノノケ《物の怪》(源氏、若菜)、「モノに襲はるるよう」(竹取)、カタマシキモ

ノ《姦鬼》(紀、景行)など不思議な力をもつ靈威、鬼神、魔物などを意味し、またマナとしてはアメノマナイ《天真名井》、マナカ《真名鹿》(紀、神代)、マナツル《真名鶴》(記、倭姫)、マニとしてはフトマニ《太占》(記・紀、神代)などがあるが、これらモノ・マナは正しく人類の原初的宗教表象としての超自然的威力のそれであり、南島、特にメラネシアに起源をもつ Haha の系譜と考えられる。コドリントンによって初めて報告されたこの Haha はポリネシアをはじめ南島全体に広がっており、インドネシアで今日用いられる疑問詞の Haha も本来はおそらく同源である。

2 アニミズム

●タマ信仰

タマ《靈・魂》の信仰は今日にいたるまで強く存続し、北方、アルタイ系の人格神たるカミ信仰とともに日本人の宗教表象の二つの柱をなしている。「靈魂・神靈・人間の魂や自然物・特定の器に宿る靈……さまざま不思議な働きをなす超自然的な力」(『時代別国語大辞典』ロウ)とされる。ウカノミタマ《稻魂》、サキミタマ《幸魂》、クシミタマ《奇魂》、ニギミタマ・アラミタマ《和魂・荒魂》(紀、神代)、ミタマシズメノマツリ《鎮御魂祭》(祝詞)、イキミタマ・シニミタマ《生魂・死魂》(佳吉神代記)のごとし。

靈魂としてのタマの系統については南太平洋の土着諸宗教の報

告 H・ノーヴァーレンの Die Religionen der Südsee, 1968 や A・アルバースの Maori Myths and tribal legends, 1964 などにより、メラネシヤの tomaruh, tabaran, temes, dema, 等 リネシヤの utamata, tupua, taema などと連なるものと考えられる。

なおこのような靈魂としてのタマと前述の北方・アルタイ系に連なるタマ(玉)とについてであるが、これは全く別個の起源という断定もむずかしく、むしろ北方のものがなんらかの通路で南方に伝わったという可能性も少なくない。それはアルタイ系における例のタンガラ tangara と南島におけるタナロー tangaloa とは語形からもその内容からも無関係とみることは無理であろうとの考え方がある(大林氏『日本神話の起源』p.6)のと同じである。

●ヒ《靈》信仰

靈力、威力を有する超自然的な力(『時代別』p.603)とあるように、例えばタカミムスビ《高皇產靈》(紀・神代)、イクムスビ・タルムスビ・タマツメムスビ《生魂・足魂・玉留魂》(祝詞、折年祭)などがある。このヒの語義であるが、ヒ《火》(api) (IN) 乙類とはちがっている。ヒ《日》は甲類なので関係があるだろうとの説(例えば『時代別』)は正しいかも知れない。靈と日とがなぜ結びつくのかは直ちには明らかでないが、ヒツ《秀》(甲・乙不詳)、ホ《穂》、ヒエ《稗》のヒは甲類、ヒカリ《光》(甲類)など尖端とか秀れたとかいう意味があつたことではあるまいか。O・デンブ

ホルンによって南島祖語をみるに pigā 《wie viel? 多少》(IN) ʻviza (MN), fha (PN) などがある。pirpir 《spitzen 噴き出す》 piak 《sich trennen 離れる》 pindah 《umziehen 引きまわす》 着かえる (IN) ʻpipi 《Wange 頬》 pili 《auswählen 選ぶ出す》 (IN) ʻpinto 《klug sein 賢い》 (IN) ʻpitik 《Schnellen 速い》 鼻先をほじく ʻpintju 《入る》 (IN) など、秀れたとか穂先などの意味をもつ pi のこときものが考えられるのではなからうか。しかしいずれてもこのようなヒ《靈》はタマ《靈》に比べれば弱いことは確かであるが、これがオーストロアシア(南アシア)の pi と関係をもつのではなからうか。

以上のごとき南島系の表象ではマナが最も下層に、しかもこれは南北両系を通じて最深層にあり、タマ・ヒがその上層に位置する。

B カミ信仰

これが文字どおりカミ kami を祭る本来のカミ信仰、狭義の神道、国家神道を主柱とした神道である。カミはアマツカミ《天ツ神》、《高天ヶ原に坐す神》であり、天孫降臨の神話を柱とする信仰である。さてこの天ツ神、高天ヶ原の神とは何であるか。特にタカマガハラ《高天ヶ原》は宣長の記伝以来、松村(武)博士の日本神話の研究に代表される今日までの研究において、神道学はもちろん、歴史学、民俗学、民族学、国語学、思想史学等々、日

本学に関わる人びとの数と同じほどに数多く説かれてきたということが出来る。

●タカマガハラ《高天ケ原》

わたくしは前節Aにおいて、古代日本人の民族宗教の解明の緒として、カミ信仰以前の最も有力な信仰として、まずツチ信仰、中でもカグツチ信仰《愛宕信仰》の系譜について、アルタイ系諸民族の宗教表象に最も重要な示唆を見出したことを述べたが、このタカマガハラについてはどうであらうか。それについてわたくしはかつて「アルタイ系民族における「Tengeri」信仰——タカマガハラの系譜に関して——」（日本人類学会・日本民族学会連合大会第二五回、一九七一・11）および「タカマガハラ」（古代における日本人の思考①——固有信仰の起源をめぐって——京都女子大学・人文論叢 No.18、一九七〇・6）として報告した。「カミのもつ宗教的表象の性格や天孫降臨のモチーフなどを示す典型的な例としては、いわゆるモンゴル人のニールンゲンの歌（ヨーロッパ中世の英雄叙事詩）として名高いフリヤートモンゴルの『ゲセル・ハーン物語』があり、北京では一七二六年、ヨーロッパでも一八三九年に翻訳されていたといわれる（W. Helsing）。日本でもカーティンの探録（J. Curtin; A Journey in Southern Siberia, 1909）が訳されたが（前田氏）、このような英雄叙事詩は東北アジアから内陸ワラル・アルタイ語族に典型的で、さらに中部ヨーロッパからアフリカの一部にも見られる特色あるものというフロベニウス J. Fro-

benius の指摘は今日も承認されているようである（大林太良氏『神話』一九六六参照）。われわれはこのような資料を手がかりにカミならびにタカマガハラなどの表象を探ってきた。

われわれはこれまでの高天ケ原論議から全く根本的な発想の転換をする必要がありはしなかつたかと考えた。語義にしてもこれまでのようにタカ・アマ・ハラと一語一語に分解して詮索しても、ここからの解決はおそらく不可能で、実はこの語の由来が全く別のところからきているのではないかということであった。上記のゲセル・ハーン物語をよく注意して読むと、冒頭の幼い兒子を降す天神は「カン テュルマス テンゲリ」Khan Tyumas Tengeri とあるが、これは語調の上からも意味の上からも、日本の祝詞の冒頭に述べられる「高天ケ原に神留まります」という条とあまりにも酷似しているのに気づくであらう。事実、Khan (God 神) Tyumas (stay 留) tengeri (heaven 天) である。テンゲリはフリヤートの神話では天神そのものであるが、これについてわれわれの注意をひくのは、他のアルタイ系民族とくにヤクートであり、そこでは創造の最高神 ai-tojon (愛宕) の在すところになつており、しかも tangara と発音されている。（前掲 J. Harva S. 143）。ヤクートはトルコ系で、東北アジアでの飛び地になつており、それだけに古代の形を残していると考えられる。このタンガラとタカマガハラとの結びつきであるが、原語を意識しながら形もできるだけ近いものにしよつたものと考えられる。

例えは yōmo (四方) \wedge yōh. Tur. directions, kagi (光・影)
 \wedge Gege-n, Mo. sunbam, motō (木・本) \wedge nod, Mo. tree の
ごとく、南方語的性格の上代日本語には、原則として二重子韻、
語頭の濁音、n 終りなどはなかったといわれているからである。

●カミ kami

カミ信仰のカミはこのようなタカマガハラの神であり、そこから
降臨する神である。アルタイ系の天神信仰のモチーフや内容に
ついては松村(武)、岡(正)、中田(干)、大林(大)氏らをは
じめ多くの先学がくわしいが、言語的にも結びついていると考え
られる。日本語のカミのシが乙類で kami であり、例えばカムツ
マル《神留》、カムナガラ《惟神》、カムヌシ《神主》、カウガウ
シハカムガムシ《神々し》のごとくである。khan, kagan のよ
うな n 終りについても前項に述べた。

●カムロギ《神漏伎》

これは祝詞の冒頭に現れるにもかかわらず、これまで未解決で
あったが、村山教授がイザナギのナギを南島祖語 註 lat. 《男・夫》
として、イサハイタヒタ、ヒト、第一の、として解かれ、カム
ロギのロギについても lat. と考えられるかも知れないと示唆さ
れた(『語源』p.199)。このようにカムロギも男神と解してよいと
思われる。ただししかしこの天孫降臨における内容からみると、そ
れは単なる男神に尽きるものではなく、なにか重要なものが隠さ
れているのではないか。それは高天ヶ原に在すタカミムスビであ

り、タカギである。アルタイ系民族が tangara や ai-tojon な
どとともに最高神とする kornosta の音訓混合訳ともいうべきも
のタカマガハラの場合と同様ではなからうか。漏の字を当てたの
も、単に音ではなく天降る意を含蓄させたものとみられないか。
(これについても「古代における日本人の思考」(2)一九七〇)

C 宗教表象と種族文化の複合

岡正雄氏は、日本の固有文化そのものもいくつかの異質・異系
の種族文化から成立したものとして、その種族文化の再構成を
試みられた(『日本文化の基礎構造』『日本民族学大系』2)。すなわち
(1)母系的・秘密結社の・芋栽培―狩猟民文化 (2)母系的・陸稻栽
培―狩猟民文化 (3)父系的・「ハラ」民族的・畑作―狩猟民文化
(4)男性的・年齢階層的・水稻栽培―漁撈民文化 (5)父権的・「ウ
ジ」氏族的―支配者文化 である。(1)は靈魂・祖靈崇拜や折口氏
のいわゆるマレピト信仰で、特にメラネシアに示唆される。(2)は
開闢神話で東南アジア特にオーストロアジアに連なり、(3)は弥生
式文化の北方的要素として、特に満州、朝鮮のツングース系種族
と関わるのではなからうか。(4)は開闢神話などにみられ、オース
トロネシア系で東南アジア、中国中・南部を経て弥生時代に、(5)
は天皇氏族を中心とする種族文化で、神話では天孫降臨系にみら
れ、ツングースなどアルタイ系に連なるとする。大林太良氏はそ
の『日本神話の起源』で、岡氏の考えを大筋で認められ、日本の
神話群を四つに分けられている(p.239)。すなわち、岡氏の(5)は

もちろん天孫降臨とし、(4)は「天地開闢 アマテラス」とし、次に「出雲神話」についてはやはり(4)に近いもので、南鮮を經由したかもしれないとされ、最後に「日向神話」については、岡氏が(4)に入れられている点を、近いものとはしながら、保留し、特にインドネシアに連なるとされている。

そこでわれわれの宗教表象とこのような神話群や種族文化の複合とはどのような関係があるであろうか。南方系のモノ信仰がメラネシアに連なることはもちろんであるが、これは日本人の意識の最深層にあり、縄文式時代もかなり古いところまで遡るものと思われる。次にタマ信仰はモノよりも後に成立したにはちがいないが、やはり古くて岡氏のいわれる(1)、(2)の段階ではないか。ヒ(靈)の信仰は大林氏の日向系神話に連なるように思われる。北方系については、カミ信仰が岡氏の(5)に当たるとはいうまでもないが、ウシ(ヌシ)・ムチ・ツミなどの信仰は岡氏のいわれる弥生式時代の北方的要素として、出雲系神話は弥生式時代の早期に(大林氏では天孫降臨と同様に古墳時代とされるが)北方的種族による南方のそれのなんらかの形で統一と考えてはどうであろうか。すでにオホクニヌシという、クニ《国》(gurun, Ma-gurun, Mo.)が存在し、なんらかの段階での国家が存在したことを意味する。それがさらに北方天孫系によって統一されるといふことになる。ツチ信仰はヌシなどに先立ち、チの信仰はならに古いと考えられる。

II 古代日本人の意識における二つの方向

——生命性と人格性——

A 南島系と生命の表象

1 植物性の表象

タネ《種子・核》tanah < Erde, Land, IN, > tanam < Pflanzen > (O. Dampwolf, S. 130; 村山『方法』p. 122, 151) などわれわれの注意をひくのはポリネシアにおける最高神 Tane である。(H. Newmann, S. 63 u. a.)

ハナ《花》< bunga. IN > (泉井『言語の世界』p. 299; 村山『語源』p. 218)

ナマ《生》< njanan, IN. 健康な、新鮮な > (O. Karow u. a. S. 261)

ナル《生・成》< *dadi, IN > (松本 ib. p. 121)

ナ《水》< *nanum, IN. 飲む > (松本 ib. p. 166)

このような na (nV) は南島の mana, tane に連なるもので日本語の生物とくに植物の表象をみるこゝろである。

2 女性的表象

ヲシナ《女》< *binai, 南島 > (村山 ib. p. 45)

ヒナ《雛》< ib > (村山) ポリネシアの神話における女神・妻・

娘などの Hina (H. N., ib.)

ナト・ナム《妻》< nayu ← najai, IN. 妹・妻 > (O. K. S. 260; 村

引「起源」P. 34)

3 感情・情緒の表象

ナサケ《情》〈nuraga, IN. Sympathie 同情〉(O. K. S. 262)
ナゲク《嘆》〈ngung, IN. klagen〉(O. K. S. 259) 従来ナゲクはハナガイキ 長息と云われてゐるが、^{ハナ}ハナ^{イキ}ハナ^{イキ}ハナ^{イキ}か。

ナク《泣》〈me-nangis; 泣く nguk 泣く声〉 IN. 〈O. K. S. 259〉 *taqit, IN. 〈和訂『方法』p. 90)

ニクム《憎》〈enek, IN. ubel; ekelerregent 青悪 嫌な〉 (ib. S. 94)

ナミタ《涙》〈na-mita, mita = mata 目〉(村止『語源』p. 156)
ナツク《懐く》ナヤム《愁》^{ナツク}ナ^{ツク}ナ^{ツク}ナ^{ツク}日本人の生命の表象は南島の na (HV) ^ナナ^{ツク}ナ^{ツク}ナ^{ツク}。

B アルタイ系と人格の表象

1 動物の表象

チ《血》〈tusun, Mo.〉(村止『系統』p. 60' 服部説を含めて)

イク《生》〈weixn, Tu.〉(山本謙吾 695)

イキ《恩》〈ergen〉(ib. 39)

ウム《産》〈amrji, Mo. 安まる' 分娩する〉(小沢『モンゴル』p. 19)° 〈um, Tur. 腹痛 uma, 腹膜〉(Rasänen, S. 51)

ウス《産・生》〈Danji, Tu. 生む' 生れぬ' 生じぬ〉(山本

694)

2 男性的表象

【チチ】チ《心》〈cige, Mo.〉(W. Heissig, S. 52)

チカラ《力》〈tixula, Mo. 重要な' 非常に必要な〉/ 〈tidaxu, tidal, Mo. 可能' 能力〉(ib. S. 106)° ^チチ^{カラ}チ^{カラ}チ^{カラ}チ^{カラ}述べた表象に連なるものと考えられる。

3 意志の表象

イチ《意地》〈oigün, Mo. 頑固な' 強情な〉。(小沢' p. 302)
漢字の意地は日本の造語である。意気地などもこれの交替形ともいふべきである。〈üs, Mo. 嫌悪' 敵意〉(Heissig, S. 60)° 〈üstei, Mo. 固執する〉(ib.)

ホシ・ホル《欲》〈xüsel, Mo. 欲求' xüs- 欲する〉(小沢' S. 509)° 〈chai, Tu. 思ふ' 自由〉(山本' 2969)

C 存在と現象(南北の対比)

アリ《在・有》とヨリ《居》——前者は南島語〈ada, IN.〉で客体的・自然的述語なのに対し、後者は北方語〈bi, bü, Tu.〉に由来し、行動的・主体的述語である。

ナル《生》とソク《著》——「美ガナル」と「美ラツケル」。前者は南島語〈'adi, IN.〉と同じく自動詞的・即自的表現であるが、後者は〈tuku, Tu.〉のように他動詞的表現、つまり対立的・対自的表象である。

オモフ《思》とカムガフ《考》——前者は南島語〈nohon, IN.〉に由来し、胸に思う、欲する、心配するの意が本来であるが、後者は北方語〈xargal, Mo.〉に連なり、注意する、監視する、熟

慮するといふような意味である。心情と知性との方がいである。オボユ《覚》とシル《知》——前者は南島語へ *mohon*, *ih* へあり、後者は北方語へ *seré*, *Tu* へと同じく、感覚的と悟性的とのちがいである。

タマ《魂》とココロ《心》——前者は南島語へ *tabaran*; *temes*, *Mel* へ由来し、後者は北方語へ *köküz*, *Tu* へ由来し、*soul* *mind* とのちがいである。

以上のごとき南北の対比により、前者が植物的・女性的・感情(情緒)的性格など生命性の方、生命共同体への方向をもち、後者が動物的・男性的・知的意志的性格など人格性の方向を特色としていふことが知られる。

D 価値語について

日本語の価値を示す語としてのネ《値》とかシナ《品・科》とかいふ語そのものも北方語が用いられることが多く、前者は *line*, *Mo* へ、後者は *linar*, *Mo* へに連なる。ただアタヒ《価》は南島起源とされる。へ **ha(n)dep*, 正面、対当へ(村山『國語学の限界』p. 133)

スキ《好》とキラヒ《嫌》——前者には北方語にへ *kiralan*, *Tu* へがあり、後者には南島語へ *kiri*, *IN* へ、左の、不吉なへがあるが、しかしイヤ《厭》は北方語へ *ubiyada*, *Tu* へがある。

マコト《真》とウソ《偽》——前者にはへ *magad*, *Mo* へがあり、後者にもへ *ese*, *oso*, *Mo* へがある。

モロシ《善》とワロシ《悪》——前者にはへ *sih*, *Mo*, *Tur* へ(村山『語源』p. 137) 後者にはへ *halax*, *Mo*, *welle*, *Tu* へ、緒となる。

タタシ《正》とミロシ《邪》——前者にはへ *daligu*, *Tu*, *toda*, *Mo* へがあり、後者にはへ *sage*, *Mo* へがあるが、前者の *toda* は小沢氏、後者は村山氏。ただ前者について村山氏は南島語 **dai* 出を採っておられる。

ウツクシ《美》とミニクシ《醜》——前者にはへ *icu*; *saxan*, *Mo* へがあり、後者にはへ *mukai*, *Mo* へがある。

これらについてまだ十分な比較言語学的手続きがなく、その緒としての資料を示すのみに止まっているものも多いが、しかし全体として日本人の価値語の主要なものが圧倒的に北方語であることは否めないと思われ、この事實は、南島語と北方語との大きな言語接触の生じた西紀前後における南島語の性格の文法構造のアルタイ系化とともに種族文化の政治的支配構造と無関係ではないと考えるべきではなからうか。

結 語

以上の試みは極めて素拙なものであるが、古代日本人の意識における南島の要素は生命性を志向し、北方アルタイの要素が人格性を志向し、前者は水平表象的、内在志向的であるに対し、後者は垂直表象的、超越志向的である。これらの前者は中国文化の

中では滂流的道老思想やまた仏教思想に対応、受容消化する素地となり、後者の性格が中国文化の主流、いわば中国的ヒューマニズムに対応、受容消化し、また広義のヨーロッパヒューマニズム受容の素地ともなつて、日本人の性格の両面を形成していると考へることができよう。この点について本稿に關していえば上述の中で、南島のマナに基づく《モノ》意識の思想的解明は非常に重要だと思われるが、それは別稿にゆずりたい。

(しば・すすむ、日本思想史、花園大学教授)